

[症例・事例・実践報告]

卒業前看護技術自主トレーニングの取り組み

長谷川隆雄¹⁾, 中山 和美¹⁾, 栗原 弥生¹⁾

キーワード：看護技術, 卒業前, 自主トレーニング, 看護実践能力

Voluntary Nursing Skills Training Before Graduation

Takao Hasegawa¹⁾, Kazumi Nakayama¹⁾, Yayoi Kurihara¹⁾

Abstract

Among the changes in medical practices in recent years, the low level of proficiency in nursing skills and other practical abilities of new nursing graduates has become an issue. In order to resolve this problem, 79 students participated voluntarily in (1) taking venous blood samples (students drew each other's blood), (2) oronasal suction, (3) preparing an intravenous drip, and (4) handling sterile items. After the completion of training, the participants completed an anonymous questionnaire. Many responded that they had achieved their respective goals, and all responded that the training would be useful after graduation. Responses such as "I know what knowledge and skills I am lacking", and "I know what it means to be a responsible nurse" showed that the students had also clarified future issues for themselves. However, we also identified a need to look into the selection of nursing skills and how to implement them, time available for acquiring these skills, evaluation methods, and student motivation.

Key words : nursing skills, before graduation, voluntary training, nursing abilities

要旨

近年、医療を取りまく状況の変化の中、看護技術の未熟さなど、新卒看護師の実践能力が課題であるとされている。その解決策のひとつとして、卒業直前に学生が自主的に取り組むという方法で看護技術のトレーニングを実施した。参加学生は79名で、①静脈血採血（学生同士での採血）、②口鼻腔内吸引、③点滴の準備、④滅菌物の取り扱いについて実施した。トレーニング終了後、参加

学生を対象として無記名によるアンケート調査を行った。その結果、それぞれの目標が達成できたとする回答が多く、全員が「卒業後に役立つ」と回答していた。また、「知識と技術の不足を再確認した」や「看護師として責任を実感した」というように、学生は、今後の自己課題についても明確にすることができていた。したがって、本取り組みが有効であったことが示唆された。しかし、実施する看護技術の選定や時間、評価方法、学生の

2010年11月30日受付、2011年1月11日受理

1) 新潟医療福祉大学 健康科学部 看護学科

[連絡先] 長谷川隆雄

〒950-3198 新潟市北区鳥見町1398番地

TEL・FAX：025-9509-4613

E-mail：hasegawa@nuhw.ac.jp

動機づけなどの検討が必要であることも明らかになった。

I はじめに

医療の高度化や在宅医療の進展など、看護職をとりまく社会状況の変化に伴って、学士課程修了者の看護実践能力が課題となり、平成16年に文部科学省の「看護教育のあり方に関する検討会」による報告¹⁾が提出された。それに基づいて、平成20年には、保健師助産師看護師学校養成所指定規則が一部改正されるに至った。本学科のカリキュラムも、4年次生を対象とした看護の統合・発展科目として統合実習や看護実践論が設けられ、看護実践能力の修得を目標としたものへと改正された。

しかし、それ以前のカリキュラムにある本学科1期生については対象外であった。そのため、平成20年度から学科内で検討した結果、新卒看護師の離職や職場適応に看護実践能力の不足が指摘²⁾されている状況を考慮すると、卒業前に改正カリキュラムに相当するものを実施する必要があるのではないかという結論になった。そして、正規の教科目ではないことから他大学の実践³⁻⁶⁾を参考に、学生の自主トレーニングという方法で企画することになった。以下には、その概要と実施後に行った学生へのアンケート結果を中心に報告する。

II 看護技術自主トレーニングの概要

- 1) 目的は、卒業直前にある4年次学生が卒業後の就職先での実践に備えるために、就職後すぐに必要とする看護技術について、自主的にトレーニングすることとした。
- 2) 対象は看護学科4年生とし、事前に希望を募った結果、79名の参加があった。
- 3) 実施日については、国家試験終了日から卒業式の間で、学生の希望が多かった平成22年3月4日と3月5日とした。
- 4) 指導体制については、本トレーニングは学生が自主的に取り組むものであるが、安全への配慮および正しい看護技術の修得に向けて、本学科の全教員が助言、指導にあたることとした。
- 5) 実施内容

(1) 看護技術の選定

学生に実施を希望する看護技術項目について調査し、その上位であった①静脈血採血、②口鼻腔内吸引、③点滴の準備と滴下調節および、これらの技術を実施するための基礎となる、④滅菌物の取り扱いの4項目を選定した。

(2) 実施方法

学生を実施日ごとに2組に分け、さらに1組を

4グループとし、グループごとにローテーションする方法で実施した(表1)。また、学生は2人ペアになり、それぞれの技術を確認しながらすすめ、静脈血採血においては、そのペアで看護師役と患者役になって実施した。

(3) 静脈血採血の学生相互の実施について

学生相互の実施は希望者のみとし、書面による同意に基づいて実施した。実施に際しては、事前にシミュレータで十分に練習し、教員の監督の下で行い、1回の穿刺を原則とした。また、本学校医の承認を得て実施し、当日は学内での待機を依頼した。

(4) 事前学習について

学生には、本トレーニングは学生が自主的に取り組むことを基本としていることを説明し、参考文献を提示するとともに手順書として資料を配布して事前に十分学習することを求めた。また、実施前にビデオによる学習の時間を設けた。

表1 タイムスケジュール

時間	1グループ	2グループ	3グループ	4グループ
9:00~ 9:10	オリエンテーション			
9:10~ 9:50	ビデオによる学習			
9:50~ 10:50	滅菌物の取り扱いと創傷処置			
10:50~ 11:00	休憩			
11:00~ 12:10	口鼻腔内吸引	点滴の準備と 滴下調節		
12:10~ 13:10	昼食			
13:10~ 14:20	点滴の準備と 滴下調節	口鼻腔内吸引		
14:20~ 14:30	休憩			
14:30~ 16:00	静脈血採血			
14:30~ 16:00	ふり返りとアンケート記入			
16:30~ 17:00	あとかたづけ			

III 実施後のアンケート調査

- 1) 本トレーニングの評価を目的として、実施後に参加学生を対象としてアンケート調査を行った。アンケートは無記名とし、学生には結果は公表することがあること、その上で、提出の有無は自由意思によることを書面で説明して実施した。
- 2) 調査項目は、実施看護技術項目の達成状況に関す

るもの9項目、トレーニングへの取り組みに関するもの2項目、トレーニングの企画等に関するもの2項目の13項目とし、それぞれについて、①非常にそう思う、②そう思う、③そう思わない、④まったくそうは思わない、の4段階評定法で回答を求めた。さらに、看護技術に関する今後の課題や本研修に参加しての感想について自由記述の項目も設定した。

3) アンケートの分析は、4段階評定法による回答については項目ごとに集計し、自由記述については内容を検討、類似のものに集約、分類する方法で行った。

Ⅳ 実施後アンケートの結果

アンケートの回収数は76名であり、回収率96.2%であった。

1) 4段階評定法による回答 (表2)

各質問項目について「非常にそう思う」、「そう思う」を合わせると、本トレーニングで実施した看護技術項目の達成状況に関するものでは、「創傷処置を実施できた」72名、「滅菌手袋の装着を実施できた」69名の順で回答が多かった。少なかったのは「滴下調節を実施できた」58名、「他学生の採血を実施できた」57名というものであった。

トレーニングへの取り組みに関する項目では、

「事前学習を十分行った」は40名で、13項目中最も少ない回答であったが、「積極的に取り組んだ」は73名であった。

トレーニングの企画等に関するものでは、「卒業後に役立つ」と「参加してよかった」の2項目とも76名という結果であった。

2) 自由記述の内容 (表3)

自由記述では、自分自身の看護技術に関する「課題」についての記述が最も多く、「根拠に基づいた看護技術を身につける」37名、「患者さんのために確実な技術を身につける」18名などであった。続いてトレーニングが「よかった」とするものでは、「就職前に練習できて自信がついた」22名、「今日の体験を今後活かしていきたい」17名、「知識と技術を復習できてよかった」15名などという結果であった。

これまでの看護技術に対する自身の取り組みへの「反省」では、「知識と技術の不足を再確認した」20名、「看護師として責任を自覚する必要性を実感した」12名などであった。

また、「ご指導いただいた先生方に感謝したい」10名、「先生方のアドバイスに勇気づけられた」6名など、教員に対する「感謝」の記述もあった。「要望」としては、「時間が足りなかった」4名、「他の看護技術も行いたかった」2名というものであった。

表2 実施後アンケート4段階評定法結果

単位：名 (%)

項目	非常に思う	そう思う	そう思わない	まったく思わない
1) 滅菌物の取り扱いを実施できた	17 (22.4)	48 (63.2)	11 (14.5)	0 (0.0)
2) 創傷処置を実施できた	20 (26.3)	52 (68.4)	4 (5.3)	0 (0.0)
3) 滅菌手袋の装着を実施できた	43 (56.6)	26 (34.2)	7 (9.2)	0 (0.0)
4) 口鼻腔内吸引を実施できた	12 (15.8)	48 (63.2)	15 (19.7)	1 (1.3)
5) 点滴の準備を実施できた	14 (18.4)	44 (57.9)	17 (22.4)	1 (1.3)
6) 滴下調節を実施できた	23 (30.3)	45 (59.2)	7 (9.2)	1 (1.3)
7) 輸液ポンプの操作を実施できた	18 (23.7)	44 (57.9)	11 (14.5)	3 (3.9)
8) シミュレータの採血を実施できた	32 (42.1)	35 (46.1)	9 (11.8)	0 (0.0)
9) 他学生の採血を実施できた*	25 (33.8)	32 (43.2)	13 (17.6)	4 (5.4)
10) 事前学習を十分行った	7 (9.2)	33 (43.4)	34 (44.7)	2 (2.6)
11) 積極的に取り組んだ	47 (61.8)	26 (34.2)	3 (3.9)	0 (0.0)
12) 卒業後に役立つ	60 (78.9)	16 (21.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
13) 参加してよかった	69 (90.8)	7 (9.2)	0 (0.0)	0 (0.0)

*：学生相互の静脈血採血は74名が実施 (希望者)

表3 自由記述の内容

分類	内容	人数
課題	・根拠に基づいた看護技術を身につける	37名
	・患者さんのために確実な技術を身につける	18名
	・準備から手順を考えて実施する	7名
	・落ち着いて行動する	6名
	・患者さんの安全の確保を最優先に考える	4名
	・状況に応じてできる応用力を身につける	4名
よかった	・就職前に練習できて自信がついた	22名
	・今日の体験を今後活かしていきたい	17名
	・知識と技術を復習できてよかった	15名
	・就職後すぐに役立つと思う	9名
	・実際に採血を経験できてよかった	7名
	・卒業前にみんなでできてよかった	5名
	・失敗もあったがこの経験は忘れないと思う	2名
反省	・知識と技術の不足を再確認した	20名
	・看護師として責任を自覚する必要性を実感した	12名
	・事前学習が不足していた	10名
感謝	・ご指導いただいた先生方に感謝したい	6名
	・先生方のアドバイスに勇気づけられた	3名
	・先生方の思いが伝わるトレーニングだった	2名
要望	・時間が足りなかった	4名
	・他の看護技術も行いたかった	2名
その他	・実際の採血は緊張した	3名
	・教員の指導方法が異なることがあった	2名

V 考察

本トレーニングについて、実施後のアンケートに基づいて評価した。その結果は、実施した看護技術が達成できたか否かについては、項目により57名から72名ができたとするものであった。今回は実施後の調査のみであったが、同様の取り組みを行い、実施前後で比較した研究⁶⁾では、学生の自己評価は前後で有意に差があり、看護技術の向上になったという報告がある。また、卒業後1ヶ月に調査した報告⁷⁾では、卒業直前に実施した看護技術トレーニングに対して肯定的な結果が示されている。本取り組みについても同じ結果であると考えられる。学生の自由記述でも、「よかった」とするものが多く、本トレーニングを通して学生は、自身の看護技術の「課題」についても明確にできていた。そして、助言、指導にあたった教員への「感謝」も述べられていた。この結果は、他大学の取り組み³⁻⁶⁾と同様のものであり、トレーニングが有効であったことが示唆される。

しかし、「要望」にもあるように実施する看護技術の選定やどの程度の時間で行うかなどの問題がある。また、「事前学習を十分行った」とする学生が少なく、自由記述でも「事前学習が不足していた」とする状況は、トレ

ニング前の動機づけが不十分であった結果であると考えられる。評価方法についても、今回は実施後のアンケートのみで試みたが、到達目標を客観的にどう評価するかの検討も必要である。さらに、看護実践能力については、看護技術のみではなく、複数の患者を受け持ち、多重課題に対処できることが求められるという指摘⁸⁾もある。今後は、これらについて解決し、よりよいものへと改善していくことが課題であると考えられる。

VI おわりに

最初の卒業生を送り出す本学科において、卒業前に学生の看護実践能力をどのようにするかは大きな課題であった。本トレーニングは、その一助になればということとで学科をあげて取り組んだものである。

しかし、全てが初めての取り組みであったため、準備不足などもあり、十分といえるものではなかった。そのような中で実施できたのは、正規の教科目ではないにもかかわらず、全教員が関るという体制ができたことによるものである。卒業生とともに教員の皆様に心より感謝申し上げる。

引用文献

- 1) 看護学教育のあり方に関する検討会：看護実践能力の充実に向けた大学卒業時の到達目標，文部科学省，2004.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018-15/toushin/04032601.htm
- 2) 日本看護協会：2004年「新卒看護職員の早期離職等の実態調査」結果（速報），
<http://www.nurse.or.jp/home/opinion/newsrelease/2005pdf/20050811.pdf>
- 3) 日本看護系大学協議会編：看護学教育Ⅲ 看護実践能力の育成，日本看護協会出版会，33-36，2008.
- 4) 登喜和江：学生の自信につなげる「就職前看護技術トレーニング」，看護展望，33（13）：31-35，2008.
- 5) 登喜和江，森下晶代，川上由香ら：就職前看護技術トレーニングの試み－技術トレーニング前後の自己評価の変化－，日本看護学教育学会誌，19（2）：41-49，2009.
- 6) 清水恵子，村松照美，萩原結花ら：「卒業時看護技術演習」の具体的展開と成果，看護展望，33（13）：25-30，2008.
- 7) 登喜和江他：大卒看護師の看護技術に関する調査－就職後に感じる看護技術の困難感と対処行動および院内技術研修－，第38回日本看護学会集録集（看護教育），90-92，2008.
- 8) 高屋尚子，寺田麻子，西野理英ら：特集 実践力が育つ学内演習 多重課題への対応，看護展望，32（8）：31-37，2007.